

日本人留学経験者を対象とした自助グループ的ミニセッション  
 —帰国後異文化間教育の試み—

○高濱 愛 (一橋大学)・田中 共子 (岡山大学)

I. はじめに

海外留学を終えて帰国した日本人学生を対象とした調査によれば、彼らはリエントリーに際して何らかの逆カルチャーショックを経験し、ケアを必要とする存在であるという (高濱・田中, 2011a)。我々は帰国後の異文化間教育の観点から、「留学経験者のつどい」と題した自助グループ的なセッションを実施してきた (高濱・田中, 2010; 2011b)。しかし学生の帰国時は、就職活動や大学院入試等が行われる繁忙期となっていることが多く、帰国した学生を一堂に集め、かつ長時間の活動を運営していくことには、しばしば困難が伴う。そこで今回は、そのバリエーションとして少人数・短時間の単発型ミニセッションを実施したので、その概要と反応を報告する。

II. 方法

**調査対象者** 日本のP大学の学部生2名 (表1)。彼女たちは、P大学の短期交換留学生として、協定大学に約1年間派遣されていた。

表1 セッション参加者の属性

| ID | 性別 | 年齢 | 留学先地域名 | 留学期間 | 帰国後経過期間 |
|----|----|----|--------|------|---------|
| A  | 女  | 20 | イギリス   | 11か月 | 5か月     |
| B  | 女  | 23 | タイ     | 11か月 | 8か月     |

**設定** P大学において、約1時間にわたって、ミニ版「留学経験者のつどい」を開催した。参加者は上記2名で、留学経験のある筆者ら2名がオーガナイザーとして参加した。セッションの様子はビデオカメラで録画し、後に逐語録を作った。

**使用教材** 高濱・田中 (2010; 2011b) で使用した、「留学経験者のつどい」のバインダー式のテキストの中から、留学経験を生かした将来プランに関する部分を用いた (表2)。セッションでは、テキストの項目をたどりながら、留学経験をいかした将来プランについて語り合ってもらい、オーガナイザーは進行役・聞き役をつとめた。セッション前と後には、逆カルチャーショックの経験とつどいの評価に関するワークシート (5件法、自由記述法) を記入してもらった。

表2 テキストの使用部分の目次

|                |         |                          |                           |           |                |
|----------------|---------|--------------------------|---------------------------|-----------|----------------|
| 留学経験をいかした将来プラン | 1. 進路選び | 2. 進路選びのヒント①～経験の「たなおろし」～ | 3. 進路選びのヒント②～〇年後のキャリアプラン～ | 4. 学びの発展法 | 5. 留学後*に役立つ情報源 |
| 6. 自分の将来設計     | 7. まとめ  | ※「留学後」とは、帰国後を指す。         |                           |           |                |

III. 結果と考察

セッション前評定では、2名とも逆カルチャーショックの経験を記した。「帰国後は自分の“普通”が通用しなくなっている上に、周りの日本人 (に) は分かって当然だ

と思われているので、しんどかったです (A)」などと書かれていた。帰国後の問題として、「自分がゆらいだ (A)」「帰ってきたらいきなり就活で焦った (A)」「一年進級が遅れた (B)」等が挙げられた。意欲に関する項目として「留学経験で社会貢献をしたい」、「後輩の留学サポート」をしたい気持ちの度合いを尋ねると、2名とも「5. 大変あてはまる」を選んだ。一方で、「将来のキャリアプランを持っている」という項目の当てはまり度合いは、両名とも「3. どちらでもない」であった。

語り合いでは「(留学の成果を) ビジネスでいかしたい (A)」「MBAを取りに (海外へ) 行きたい (A)」「海外と関わる仕事をした (い) (B)」「もう1、2カ国語くらいはやりたい (=勉強したい) (B)」といった将来の意欲が語られた。

セッション後評定を見ると、「集いで得たもの、気付いたこと、役立ったと思うこと」には、「留学の経験を振り返るチャンスが意外となかったことに気付いた (A)」「忘れていた経験 (中略) を思い出せた (B)」と記していた。「今日の集いを、今後どう生かせようですか」との問いには、「留学という経験を生かす方法が広がった (A)」「自分の考えを整理して、忘れないようにする。形に残せる (B)」と書かれていた。「今日の集いに出て良かったですか」との質問には、2名とも「5. とてもよかった」を選んだ。集いの感想を尋ねると、「自分の意見が共感されたり、自分が共感したりすることがあまり多くなかったので安心できた (A)」「今までにないタイプのつどいで有意義 (B)」と記した。

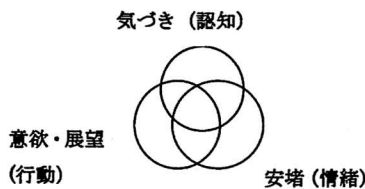


図1 セッション効果の「三要素」モデル

結論として、少人数で短時間行うセッションでも、先のオリジナル版セッション (高濱・田中, 2010; 2011b) と同様に、認知・行動・情緒的な効果の認識が示された (図1)。気づき、意欲・展望、安堵が得られる点で、セッション規模によらず比較的安定的な感触が得られるようであり、ミニ版セッションの活用可能性が示唆される。

#### 引用文献

- 高濱愛・田中共子 (2010) 「帰国後日本人留学生のケアを目的とした自助グループ活動」『多文化関係学会 2010 年度第 9 回年次大会抄録集』, pp. 66-69
- 高濱愛・田中共子 (2011a) 「短期交換留学生のリエントリー・ステージにおける課題の分析—逆カルチャーショックと留学活用を中心に—」『人文・自然研究』5号, pp. 140-157
- 高濱愛・田中共子 (2011b) 「海外留学から帰国した日本人学生を対象とした留学後教育：ケアとキャリア形成のための自助グループの試み」『2011 年度異文化間教育学会第 32 回大会発表抄録』 pp. 150-151
- 謝辞 本研究は、平成 21 年～22 年度科学研究費補助金 (挑戦的萌芽研究 21653090 代表 高濱 愛) の助成を受けた。